高橋久美子（高橋久美子）

二〇二一年五月、渋谷のライブハウスで元バンドメンバーのえっちゃんと、四星球の康雄くんとトークイベントをした。康雄くんは鳴門教育大学時代の一つ後輩で同じ軽音楽部の仲間でもあった。えっちゃんも軽音部で、康雄と同い年なので、楽屋に入ったときから同窓会のような安心感と照れ臭さに包まれた。

せっかくだからと、三人でセッションをすることになって、私もちょっとだけドラムを叩いた。みんなの前で叩くのは、二〇一八年のチャットモンチーの「こなそんフェス」ぶりかな。その時も飛び入りで一曲叩いただけなので、実質二〇一二年以降は全く叩いていなかった。

吹奏楽時代、一日練習を怠ったら三日後退すると言われていた。この恐怖のお告げにより、盆も正月も休むことが怖くて私達は練習し続けた。今はもう部活でそんなこと言われないかもしれないが、当時は音楽もスポーツもスパルタだった。なので、九年も叩いてない私の体からドラムは抜けきっているものと覚悟していた。

上手いか下手かは別にして、今には今しか叩けない音があるんだなと思った。これはこれでいいなと。今すぐに詩を作ってみてと言われたらできないけど、スティックを渡されて何か叩いてと言われたら、悩まずとも下手なりに叩ける。うーむ。文章で食べている今としては逆であるべきなんだろうけど、それが頭と体の違いなのだと思う。ドラムは反復運動でもあり、体で覚えたことは消えないんだ。

康雄くんが「高橋久美子（作家・作詞家）だけど、久美子さんは何通りもの人生を歩いているから、『高橋久美子（高橋久美子）』ですよね」と言った。さすが、うまいこと言いよるわーと思った。でも、突然サッカー選手になったわけでないんだし、そんなレアケースじゃないと思っているんだけどねえ。

「小説家」とか「エッセイスト」とか、一本だと職人感があって格好いいけど、私は、小説、詩、エッセイに加えて歌詞提供や絵本の翻訳、朗読なんかもしているし、そもそもドラムをしていたっていう過去もある。確かに、自分の肩書やプロフィールを説明するのには手こずる。十年も前に脱退しているのに、未だに元チャットモンチーをつける人も多く、申し訳ない気持ちになる。なので、康雄くんの一言は的を射ていて、優しさでもあり、いいやつだなと思った。

ドラムを叩いたとき、体に確かに風が通り抜けて鯉のぼりのように泳いだ。これは

書いているときにはない感動だ。音楽も、小説も、答え探しではなく、自分が答えを作る。書く言葉は残っていくが、音は残らず消えていくもので、だからこそ感覚として体に刻まれる。私には風が時々必要だなと思った。

橋本絵莉子、という人はやっぱり努力家で、完璧主義だ。「その場の流れで演奏しようねー」と言っていたけど、早々に自宅で歌った練習音源を送ってくれた。私が練習しないのを見抜いている。さすがだ。

ロックでいるために、ちゃんとするのがえっちゃんだ。いや、元々がロック体質なんだろうなあ。それは、このごろよく考えるライブハウスの独特の作法のようでもある。ステージは神聖な場所だから、きっとどんなラフなトークイベントであろうと、準備を怠らない。それは明日の自分のためでもある。二人を見ていて、タイプは全然違うけどすごくそれを感じた。

後半、今は徳島で暮らすベースのあっこちゃんに電話を繋いだ。配信されていると思うと、聞きたいことも聞けなくて、案の定、上手く喋れなかったわけだけれど、こういうときのあっこちゃんのどっしりした佇(たたず)まいは昔から変わらない。新刊のリリースが続く私の多忙さをねぎらってくれた。気遣いが嬉しく、それに対し何の言葉も出てこない自分が恥ずかしい。

それにしても思うように喋れないのは、全世界に配信されているからか。それとも四人だからか。よく考えると、大学時代でもこの四人で喋ることってなかった。私をはずした同級生三人、もしくは康雄のいない私達三人というのはよく見た絵面だけど、なんやこの四人組は！　途中で私は我に返っていた。微妙に気を遣い合って、絶妙に大人の間合いで。ああ、お酒を……配信を切ってお酒を入れてください。

いや、お酒を入れたところで、私達が話すことは目に見えている。昔の思い出話か、健康のことか、実家のことか、ペットのことか。昨日のことも、今日のことも知らない。知っているのは昔のこと。互いの体調や近況を気遣いあうことが普通にできてしまうのは、大人になったからではなく、なかなか会わなくなったからだ。今はもう元カレのような人々。「また会おうな」とか「元気でね」と言えてしまう不思議。空々しいが、嘘ではなくて、本当にそう思っている。旧友に送るそれのように、そこには「願い」と、岩のように重い「思い出」だけがあった。

売れ残った本を抱え渋谷駅に吸い込まれ一人になる。私は今の私に戻ってほっとしていた。会えて心から嬉しかったという気持ちを落っことさないように大事に家まで持ち帰った。新しい詩を書きたいと思った。